

「歴史・風土に根ざした 郷土の川 懇談会」報告書

国土交通省 河川局 河川計画課 課長補佐 木村 達哉
前 研究第一部 主任研究員 川井 正彦*

1. はじめに

稲作を中心とする生活を営んできた我々日本人は、洪水と隣り合わせの土地（氾濫原）に生活の場所と糧を求め、ために川を管理し、利用する知恵を長い歴史の中で育んできました。また、川は古くより重要な交通路であり、水運を通じて河川の上下流はひとつの共同体として存在していたといわれています。同時に、川はコミュニティの境界でもあり、しばしば左右岸、上下流で対立の場ともなっていました。

このような我が国における人や地域社会と川との深い関わりの証として、万葉集以降、川がさまざまな文学作品に頻繁に登場していること、清め、弔いなどの信仰の場として、そして流し雛のような民間行事や祭りが各地で今日にいたるまで脈々と受け継がれてきていること等が挙げられます。

国土交通省河川局では、長い年月を経て育まれてきた日本人と川との関わりの姿を日本文学や民俗などをあしがかりにひもとき、「日本人がどのような想いを抱きながら川と接してきたのか」、「川と日本文化との関わりはどうか」などを探ることを目的として、平成12年より「歴史・風土に根ざした郷土の川 懇談会」を設立し、議論を重ねてまいりました。

このたび、平成15年5月に開催されました第8回の懇談会において、これまでの成果をとりまとめた報告書が、懇談会の委員長であります芳賀徹京都造形芸術大学学長から、河川局長に提出されましたので、ここで、その概要をご紹介しますと思います。

2. 報告書の概要

報告書では、懇談会でご議論頂きました、和歌や俳句にみる川の姿、今様にみる川の姿、民俗にみる川の姿、祭りや信仰にみる川の姿、絵画にみる川の姿、映画にみる川の姿、近代文学にみる川の姿についてそれぞれ事例を挙げながら記述されています。以下に、それぞれの内容について、簡単に紹介いたします。

2-1 和歌・俳句にみる川の姿

清らかで変化に富む川の流れ、川で生活を営む人々の姿、千鳥や氷魚（ひお：鮎の稚魚）に代表される川の自然など、四季折々の川の風景は、古来、多くの文人に愛され、和歌や俳句に表現されてきました。

例えば、飛鳥川の激しい流れ、移りゆく淵や瀬の姿は、月日の流れの早さの比喩として使われることも多かったようですが、やがて、人の世の移ろいやすさ、無常観へとつながり、日本人独特の河川観が形成されていったと考えられます。

さらに、俳句や和歌をひも解くと、一種の詩的地誌とも言えるくらい、現地の地形に関する把握力を持っているものが見られます。

このように、古代からの俳人や歌人が、地理的な観念を持ち、地域の川の特性を踏まえて周囲の山や川を詠っているということは、世界的にも希少であり、すでに流域単位概念を持ち合わせていたことが伺えます。

2-2 今様にみる川の姿

今様は、平安時代から鎌倉初期ぐらいいまでに下って300年ほどの間に広く流行した歌謡或いは民衆歌謡というもので、現代でいえば歌謡曲に相当します。この今様では、例えば、現世のしがらみ、彼岸と此岸を分ける境として、川を謡いこみ、浄土にわたる救いを求めるものや、「天から降りてくる神は、河原に降り立ち、そして河原で遊ぶ」と信じられていたことが謡われており、当時の川の姿や人と川との関わりが特に強調されて見出せると言えます。

このように、中世の社会においては、川とその周辺は、交通の要所であるとともに、遊興の場、信仰の場として、非常に重要な役割を果たしていたと言えます。

2-3 民俗にみる川の姿

少し前の日本には、川を生活の場とする「川の民」が各地にいました。彼らは、かつては「山の民」であったのですが、近世になって、山を降り、川沿い

※) 現 応用地質株式会社 札幌支社 技術部 課長

に定住の地を求め、「川の民」となり、交易や物資の輸送、塩木流し、筏流しなどといった生業についていったものと考察されています。

一方、地方に残されている民話や伝承の中にも、川とともに生きる「川の民」の姿を見出すことができます。

2-4 祭りや信仰にみる川の姿

古代の神話や中世の今様をひもとくと、川や河原は古代から、神々が集まる神聖な場所として、日本人の信仰の対象となってきたと考えられます。例えば、京都市内を流れる賀茂川についてみると、川沿いに多くの神社が建立されており、川が神々の通り道として信じられていたことが伺えます。

また同時に、川は彼岸と此岸を分ける境界でもありました。

例えば、京都の夏の風物詩でもある祇園社の祭り（祇園祭）においても、元々は賀茂川にわざわざ舟橋をかけ、彼岸側の祇園から此岸の洛中へと、賀茂川の瀬を神輿が渡って、そして、再び返っていくものでした。

さらに、伝統的ではないものの、その地域が苦勞して川と付き合ってきた歴史、地域の人々の河川事業に対する思いから、一つの祭りを生み出すこともあります。

2-5 絵画にみる川の姿

真景図などの川を描いた絵画の場合、川を遡上、あるいは、下降するという「旅」を表現することによって、空間の移り変わりだけでなく、時間の流れをも表し、一つの物語をかもし出す役割をなしていると考えられるものがあります。

また、川は生活と密着した場所であるがゆえに様々な絵画に描かれ、その中からその時代の生活や産業などを読みとることもできます。

例えば、江戸の名所図絵が描かれるにあたってテーマとされる場所は、意識的に選ばなくても何らかの形で水に関係した場所になるほどに、江戸の町は水辺、川と重要な関係にありました。

このことは、浮世絵に影響を及ぼされたヨーロッパの絵画にも見られ、特に、浮世絵調に絵を描こうとしてこだわったのは川の存在であったようです。

2-6 映画にみる川の姿

歴史的な文学や絵画などにとどまらず、近代に

作成された映画にも、日本人の川への想いが色濃く出ていることがあります。

例えば、東京の低地を流れる荒川（放水路）についてみると、比較的歴史の浅い川ではありますが、実に多くの映画に取り上げられており、荒川が東京に住む人々にとって、身近な娯楽の場であったことが伺えます。

また、最近話題の映画でも、具体的な川ではないものの、川と人とのつながりをテーマとして映画に表現しているものも見受けられます。

2-7 近代文学にみる川の姿

近代文学においても川をモチーフや舞台として書かれた作品が数多くあります。

例えば、『すみだ川』を著した永井荷風は、荒川のその荒涼たる、茫漠たる風景（この当時荒川下流域は放水路完成後15年程度しか経っていない）に癒され、『墨東綺譚』という名作を生み出すこととなります。

このように、川と文学の関わりをみた場合、例えば、国木田独歩が誰も見向きもしなかった武蔵野の雑木林を見て美しさを見出したように、それぞれの文人たちが、その川の風景の美しさ（万人がみて美しいと感じるものではないのかもしれないが）を発見することが重要であり、また、併せて人と川との強いつながり、係わり合いの姿が見出されることが必要なのでしょう。

3. おわりに

川は、我々日本人にとって記憶の奥底にまで入っている要素と考えられます。このため、川にまつわる歴史・風土は、いかなる河川においても残されており、そして、それは、地域の特色や時代的、社会的背景、各河川の個性を踏まえてはぐくまれた、それぞれの川で固有のものといえます。

したがって、河川管理者は、工学的、生態学的な知見に加え、それぞれの川の歴史・風土を十分に把握し、個性ある河川整備に取り組んでいくことが望まれます。

なお、本報告書の詳細は、河川局のHPにおいて公開されていますので、ご興味のある方はご参照ください。

河川局HP(<http://www.mlit.go.jp/river/>)